

---

## 無限物語 第2章（光灯し）

ひぐらしの79562

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無限物語 第2章（光灯し）

### 【Nコード】

N1669P

### 【作者名】

ひぐらしの79562

### 【あらすじ】

第一章で、悲しげな最期を迎えた龍牙とその仲間たち……。

しかし、少年はあきらめてなかった……。

もう一度……。

始まり・・・。

第1章で、悲しげな最期を迎えてしまった龍牙とその仲間たち・・・。

もし、あれが夢ならば覚めてほしい・・・。

それよりも、夢であってほしい・・・。

暗闇の中で彼はそう願っていた・・・。

一度終わった物語・・・。

いや、決して終わってはない・・・。

まだこの物語にピリオドはつかないのだ・・・。

物語の間にコンマがうたれただけ・・・。

少年は願う続ける・・・。

もう一度あの村へ・・・。

## 秋風ノ遊び心（前書き）

ついに始めました！第2章！！  
まだ、未完成ですが、作者の頭の中では物語できてます！！

## 秋風／遊び心

（秋風）

悲しみの音響．．．。

どこからか、流れてくる．．．。

思い出の時．．．。

頭の中で空回り．．．。

みんなの笑顔．．．。

今、散って消えてゆく．．．。

俺の犯した罪がどんな事であれ、誰からも今じゃあ、許してもらえない．．．。

目の中が熱くなり、胸が苦しい．．．。

俺は、このままどうなるんだろう！？

分からない．．．。誰もこたえようとはしない。

なぜかって！？そりゃあ決まっている！

俺の罪が大きすぎた！．．．重すぎた！なのに、罰を受けなかった．．．。

罰から、逃げ回っていた！

今、俺がもう一度、あそこに戻るとしたら、どうするだろう！？

きつと、同じ過ちはしないだろう．．．。

理由はない。ただ本能がそう言う．．．。

そついや、この景色、前もみたよな！？

暗闇という、景色を．．．。

俺は、助けが来ると思いこんでしまった。

だが、あきらめた。

罰のない俺はやり直す必要はないと思ったからだ．．．。

．．．明日は、明日。今日は今日。月日は流れ、明後日に．．．。

意味不明な言葉を心に刻みつける。

何のためかは分からない。

俺がこないと、あそこはどうなるのだろうか？

そんなことを思い始める。

ぴかっ！？

暗闇に一つの光。

光よ、光よ、光よ、ひかり！俺はどうすればいいのだろうか！？

光は答える。か細い声で・・・。

「行きなさい。あなたの罰はありません。ですが、あなたに使命を与えます！」

辺り全体に光が差し込む。

「次のみんなは幸せに・・・。」

そのことばで光と闇は消えた。

（遊び心）

目を開けると、引越して間もない俺の部屋の天井・・・。

「あいたたた・・・。足が痺れてるし。」

俺は、痺れた足をなんとか真っ直ぐに伸ばす。そして再び、天井とにらめっこ。

今日は、土曜日か・・・。

ふと、頭の中に浮かんできた。記憶が曖昧だ・・・。さっきみた夢の記憶しかないみたいだ・・・。

「・・・暗闇。光・・・。あのときと同じような夢だったな・・・。

」

あのときとは、電車でここに来るときのこと・・・。

あのときも記憶が曖昧だったけ・・・？

びゅーー！

俺がそんな事を思っていると、窓から少し肌寒い風が入りこんできた・・・。

「おー。寒っ！誰だよ、窓開けたの！」

俺は、まだ少し痺れている足で立ち上がって、窓の所まで歩いてい

く・・・。

（窓開けたの俺だったような気もするな！。まあ、いいや！）  
腹のなり出した、午前7時30分頃……。俺は、飯を食いに階段を降りるのだった。

ガチャ！

リビングのドアを俺は勢いよい開ける！

「おはよー！！」

今日も朝から元気いっぱい挨拶をリビングいっぱい響かせる俺！  
挨拶って気持ちいいなー！

トゥルルル！

気持ちよい挨拶を終えたとたんに、リビングにある電話がなり出した。

「龍牙ー！おはようは、いいから、電話にでてちょうだい！」

ガン！

なんだよ！人がせっかく気持ちいい挨拶したのに、その言い方はー！

「龍牙！よろしく頼むぞ！がはははは！」

テレビをみながら笑っている親父……。暇なら親父が電話しろよ！

そう思いながら、結局、俺は受話器を取った。

「はい！もしもし、海道ですが、何か御用ですか？」

俺は、少し早口でしゃべる。昔からの癖だ。いらしたら早口になるという癖！

すると、受話器の向こうから、思わぬ人からの声がするのだった。

「えっ！？」

俺は、驚きを隠せなかった。

だって、電話の相手は・・・。

## 遊びほうけ（前書き）

龍牙がでた電話・・・。  
そのあいては・・・。



## 遊びほうけ

(遊びほうけ1)

キッキー!

自転車のブレーキ音が鳴り響く・・・朝、10時。

「ここかー?ファックスの地図見るかぎりじゃ。」

俺は、長い階段の下に自転車を止めた・・・。

そう、俺は月光寺というお寺に来てるのだ・・・。

えっ?なぜかって?そりゃ・・・。

「やつと、来たか・・・。待ち合わせ10分オーバー・・・。どうせお前のことだから道に迷っていたんだろう?まったくだらしのない奴だな!」

後ろからなんだかとてもむかつく口調でしゃべりかけてくる奴・・・。

「おう・・・。お前から電話って見た目に合わないな。平泉彩人!」

そう、そこにいたのは、クラスや地域別テストで万年一位・・・。顔はいいんだか、性格がだめだめというより、クールすぎる男・・・。平泉彩人だ!

「ふん。俺が・・・電話するという時は重要な時だ!決して、遊び半分という奴とはいっしょにするなよ!」

あー!腹の底から・・・。いや、足の先から頭のちよっぺんまでのすべてがむかつく奴だー!

「んで?要件は何?早くしてくれよ!俺には漫画という友達が家で待ってるんだが・・・。」

すると、彩人は、フンッと鼻で笑う。

「お前は、どういう環境で育ってんだよ?休日に漫画?笑わせるなよ・・・。」

ムカムカムカ!

「まあ、いい！早速だが、本題に入ろう……。」

話題変えた所で俺のムカム力はおさまらない……。

ただ、こいつといる時間が短くなると思うとムカム力が消える。

「単刀直入に言うぞ……。準備はいいな？」

「ああ！なるべく、わかりやすく、早くな！」

すると、彩人はコホンとせきばらい……。あれ？なんだかこいつらしくない……。落ち着きがないなんて。

「早く言えよ！」

俺は、落ち着きをなくした彩人に言った。

「じゃあ、言うぞ……。お前、一昨日引越して来ただろう？」

「あ？それがどうしたの？」

すると、彩人は目をキョロキョロさせて恥ずかしそうに言った……。

「紅川のこと、どう思う？」

……。えっ？

（遊びほうけ）

辺りは、木々に包まれた、月光寺の階段下……。

俺と彩人の会話には、少しの沈黙が訪れていた……。

「えっ……。どうって？」

沈黙は、俺の質問によって打ち消された。

「いや……。だから、お前は紅川のことを好きなのか？」

えっ？えっ？えー……？

俺は、いきなりの質問に戸惑いを隠せない……。

「うーん？えっ？さ、さあな？恋愛として見たことなんてまだないや！」

俺自身でも何が言いたいのかわからない、曖昧な返事をしてしまった。

「ふん。そうか、ならいい。」

何だか、彩人はほっとしている……。もしかして？

「お前……。もしかして……。」

「おーい！龍ちゃんーん！」

俺が、彩人に問いかけようとした瞬間……。誰かが俺を呼ぶ……。この声は……。

「げげ？何でお前達ここに？」

そうその声の主は、優香。そして、その後ろにいる2人組は、りんとらんだ！

「何でつて、せっかく龍ちゃんの家まで行って、電話したのに、龍ちゃんいないんだもん。」

「おー！？それは悪かったな……。って、何でわざわざ家に来て電話してんだよー！？」

俺のつつこみが久々に響く……。久々のつつこみって気持ちがいいなー。

「いやあ、龍ちゃんビックリ、ドッキリ、地獄の果てにご招待！作戦を決行しよう……。」

「おー！なる程なる程ー！確かにしたくなるよなー！それー！……。つて言うと思ったかー！何だよ？その作戦？かわいいネーミングセンスの裏腹に、最後、俺に氏ねと言ってるのと同じだぞ！？」

「……あはははは……！」

みんなの笑い声が響く……。幸せな時間だ！漫画読んでいる奴の気持ちが分からないや！

「みんなー！ようこそ来ましたー！ブー！」

えっ？この声？

そう、声の主はいつの間にやら俺の後ろに立っていて笑っている、桜ちゃんだ！

「おー！桜ちゃん！？いつの間に？……それに、ようこそ来ました！つて？」

俺の問いかけ……。りんが答える。

「あれ？龍ちゃん、知らんの？ここ、月光寺は、ゆうしよ正しき木

下家のお家や！」桜と天音ちゃんのお家ちゅーことやな！」

相変わらずの、訛り（なまり）関西弁口調……。まあ、伝わりやすいからいいか！

「ちなみに、俺達、花谷家なフラワーショップHanatanaiだからな！今後もよろしくー！」

弟のらんが、必要ない説明をしてくれた。まあ、俺自身も初めて知ったからいいか！

「ところで……。ここに、集まった理由ってなんなんだよ？」

俺の問いかけを彩人が取り上げる。

「こいつら、集まり」なんなのかを思いだせ！」

えっと、こいつらを見てみると、いつも遊んでいるから……。

「ふひひ！龍ちゃんもう分かったんじゃない？今日はこのメンバーで遊ぶよー！」

ミーンミーン……。

その声が合図で残り少ない蝉が鳴きだした……。

（遊びほつけ）

ミーンミーン。

木々に止まっている蝉達の鳴き声が一斉に響き渡っている……。

「へへー！こつちこつちー！」

「こらー！待てーい！」

あんなこんなで月光寺では子供達が楽しそうに鬼ごっこで遊んでいる。

「ふぎゃあ！」

「へっへー！らん一丁上がりー！」

鬼はこの俺、海道龍牙がやっている。

「後は……。彩人だけだな！」

あいつが最後に残るなんて意外だな……。見た目的にクールでがり勉強なんだがな！まあ、俺の予想じゃ、豊富な知識で見つからない隠れ

場所を考え出し隠れているに違いない！

そう！隠れ鬼のように！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれ  
！？

俺の頭の中によぎった一つの単語……。それは、聞いたこともない一つの単語だった……。けれど、なぜだろう？すぐこの言葉を聞くと、心のはりさけそうになる……。意味も知らないのに……。なんで？

ふつつつと何かがこみ上げてくる……。

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ！？」

そう、涙だ。俺は今、意味も知らない言葉に涙を流しているのだ。なぜ泣いているのか分からない自分が憎い……。

「・・・・・・・・龍牙くん？」

いつの間にか立ち止まっていた俺の隣に桜ちゃんが立っていた。

「すまないな……。俺、何で泣いているのか自分でも理解できなくて……。それがまた悔しくて、悔しくて……。」

すると、桜ちゃんはにっこりと笑って俺を見つめる……。

「大丈夫です！龍牙くんは何も悪いことはしてないですよね？」

「悪いこと……。ここに来てまだしてないと思う……。」

半泣きの俺……。恥ずかしく思えてきた……。

「なら大丈夫です！神様は怒ったりしないです！ぶー！」

「そうか……。」

だいたい分かる……。悪い事とはきつと昨日話してもらった裏山の事だろう。

「龍牙くんが泣いたのは、きっと、人生の途中で石ころにつまづいて、立ち上がることができなかったからです！だから、だから……。」

「・・・・・・・・手を差し伸べる。」

桜ちゃんの隣にいつの間にか天音ちゃんが立っていて、普段開かない口を開いたのだ。

「・・・手を差し伸べる？それは一体？」

「例えばですね・・・。私がこんな風に倒れているとします。」

桜ちゃんはそう言いながら仰向けになった。

「龍牙くん！立ったまま私に、手を差し伸べてください！」

「こ、こうか？」

そう言われ、手を桜ちゃんに差し伸べてみる。

「あれ、どうしたよ桜ちゃん？手を伸ばさないと立ち上がれないぞ。」

「

俺の言った言葉・・・。答えが出ていた。

「そうです。片方でも手を差し伸べなかつたら、手は届かず、片方は立ち上がることができず、もう片方は助けることができず見殺しにする。」

「そんな、見殺しって、やりすぎじゃないか？」

俺の問いかけ・・・。しかし、桜ちゃんの表情は固く、俺を無視して続けてしゃべりだす。

「つまり互いが互いを信じあつて手を伸ばさないと、幸せをつかむことは・・・。」

「・・・・・・・・・・否！！」

場の雰囲気は、残暑の暑さを吹き飛ばすほど冷えきっている・・・。

（遊びほうけ4）

つくつくばーし、つくつくばーし、・・・・・・・・・・。

さっきまでとは違うセミが鳴いている。

「まあ、こんなこと言ってもあなたは分からないんでしょうけどね。」

「

桜ちゃんの言葉が俺の心を殴りつける。

「幸せをつかむためには、あなたの存在が鍵なのにな・・・。」

そう言つて、桜ちゃんが行ってしまった。天音ちゃんもいつの間にかいなくなつてゐる。

「幸せか・・・。」

俺は、何がなんだか分からないまま、彩人を探し始めた。

「龍ちゃん!!」

すると、後ろから優香の声・・・。

「ん?どうした?」

すると、優香はエヘへと笑いながら喋る。

「実はさー。今から会議があるんだよねー。」

???

「会議ー?」

俺には優香が何を言ってるのか分からなかった。

「あれ?知らないんだっけ?東山地区会。」

???

「えっ?えっ?えー?何だよそれ?」

優香はありやりやという顔をして、しゃべります始める。

「龍ちゃん、本当に知らないの?東山に来たら入らないといけないはずなんだけど・・・。」

「そ?そうなのか?・・・あ!回覧版ならきてるぞ!」

すると、優香は安心したような顔をする。

「なら大丈夫みたいだね!龍ちゃんも地区会の一員だよ!」

「そ?そうなのか!?じゃあ、俺も会議に出席した方がいいってことかよ!」

優香は首を横に振る。

「いや、あたいだけでいいんだよ!」

「あれ?何で?」

優香は俺に指をさす!

「なんだってあたいは、学級委員長だからね!」

テンション高い・・・。とてつもなく今じゃついていけないかも。泣いた後だし。

「まあ、会議見たいならきてもいいよ。」

「えっ？いいのか？」

「うん！だって会長はあの木下姉妹のおじいちゃんだよ！」  
「??？」

「そうだったのかー！ー！？」

「あれ？本当に何も知らないんだね。副会長はあたいの親だよー！」  
「それも初めて聞いたよ。」

にひひひひ！と優香は笑っている。そして、

「みんなー！ー！鬼ごっこはやめて、会議に行こうよー！」

優香の一声でみんなは一斉に集まってきた。

「ふん、海道龍牙。ついにあきらめたか。」

どこからか、現れた彩人……。こいつ、どこに隠れていやがったんだ？

それにしてもこいつの言葉、聞き捨てならん。

「何言ってるんだ！俺にかかればお前なんか。」

「ふん！面白い！なら今すぐにでもおてあわせ願おうか！」

ビリビリと俺と彩人の間に火花が鳴っているようだ……。

「「勝負だ！」」

あれ？会議は？

（遊びほうけ5）

「ちよつと、2人とも喧嘩はよしなつて！」

優香の声が、蝉の声と混じって聞こえる。

「優香！何を言ってる？これは男同士のバトルだ！」

優香の声を無視して彩人との距離をつめる俺……。優香が今は弱く思える。

「紅川……。余計な手だしは無用……。すぐにコテンパンにする……。」

優香は彩人にそう言われ止めるそぶりをやめた……。

「俺達がこうやって喋るの今日が初めてなのに、何でこんなことに



んってんだろうな？」

俺の問いかけ……。彩人は鼻で笑い答える。

「フン……。そんなの決まってるだろ。」

彩人は黙り込む。あいつにとっての勝負の理由はきつと優香だろう……。

俺はそう察した。

しかし、俺がこいつと闘う理由は何なんだ……？

（お前が闘う理由……。それはこの後に深く意味を持ち。この後に深く関係するだろう……）

「……………っえ!？」

どこからか響き渡る声……。一体誰??

「……………どうした?怖気づいたか？」

彩人が俺を挑発する。

「いや、そんなのじゃない。お前には聞こえなかったのか?声が……………」

彩人は笑いだす……。

「はははははは。なんだ声って?どんな声だよ?俺の声か?またやお前の独り言か？」

「だから!違う!俺でもお前でも、ここにいる誰でもない声が……………」

がばっ!

「……………っえ!？」

「龍牙くん……。なんだか、さつきから怖いです。怒鳴ってます……。何かに……。何かに取りつかれてるみたいです……。」

我を失いかけていた俺に、桜ちゃんが抱きついてきた。そして、俺にたくさん訴えて泣いている……。

「……………ごめん。」

自分自身も何がどうなってるのかさえ分からない……。しかし、明らかにおかしい。あの声は一体。

「龍ちゃん、ここは落ち着くために、勝負はやめて会議に行こうよ！」

「そうや！それが一番やで！」  
「らんとりんも心配している。」

「彩人！あんたもいいでしょう？」  
「……………ああ。」

優香も彩人も、何も言わない天音ちゃんもきつと…………。  
みんなみんな、俺を心配してくれた。

「みんな、すまない……………ありがとう。」

あの声の正体は分からない……。だが、仲間がいたから一人で考えて、暴走しなくて良かった。

俺は ありがとう と心から思っている。

あなたと会えたそれだけで、

俺の悩みが消えました。

君に会えたそれだけで、

私の苦勞が消えました。

だから、俺と私と君たちで、

たがいに言おう……………ありがとう。

ありがとう……………  
詩題名 海道龍牙、???????

## 東山地区会／会議（前書き）

遊びに飽き・・・。

龍牙たちは、地区会の会議へと参加するのであった・・・。

## 東山地区会／会議

（東山地区会）

ここは、月光寺の本堂の隣にある東山地区会集会場……。木は黒みをおびた見た目から、そうとう昔に建てられているようだ。

木のおいが鼻の奥をくすぐる……。

「ここが、集会場か……。？なんか、木がみしみしいってるぞ！」

「まあ。１００年くらい前から建てられてるし、良く雨が降る東山に木造建築なんてもんを建てたら、木が所々腐っちゃうよ！」

優香が簡単にまとめて語ってくれる。そして、座布団を一人一枚、床に敷いて、そこに座った。

「そついや、全然まだ来てないように思えるが……。」

俺の、突然の問いかけ……。来ている人は、２０人程度……。俺達を合わせて、３０人になるかならないかだ……。

「……。いつも、……。このくらい。」

「……。え？」

俺の隣にいた、天音ちゃんがか細い声でこたえてくれたが、俺は思わず聞き返す。きつと、無口な天音ちゃんが口を開いたのにびつくりしたのかな？

「そつやねー。今日は、うちらが来たことで人数増えるもんやねー。」

「来る人は来て、来ない人は来ない……。それが、小さい頃からのお決まりだったけ……？」

りんともんも語り出してくれる。

「……。一体何でだ？」

「……。」「……。」

俺の一言で場の雰囲気は沈黙へと変わった。

多分、これも１００年罰当たり関連か……。場の雰囲気の変化より、そう俺は察した。

「………ところで、龍牙くん？まだ会議じゃないのに正座なんかにして、足痺れませんか？」

沈黙を打ち破ったのが、桜ちゃんだった……。

「ん？あはは！大丈夫！大丈夫！俺、正座には慣れてるんだよ！」  
びりびり！

「痛っ！！！！」

ドタン！

この効果音を聞いて、だいたい分かるだろうが、一つ言いたい事がある！

「足の痺れには気をつけろよ！」

場の雰囲気は光へと変わり、笑い声が集会所に響くのであった……。

### （会議１）

俺達が集会所に来て、何分経っただろうか？地区会議というのは未だに始まらない。いい加減、飽きてきたぞ。

「ふぁ~~~~~~~~~！」

俺は、ワザとらしく、あくびをして見せる。

「ゴホン！」

集会所に来ている、おじさんの、せきばらい……。多分、俺に対してかな？

「龍ちゃん！ここに、おる人はみんなあんたの事、まだ知らんやで！」

「そうそう！そんな感じにあくびすることによって、第一印象が悪くなるよ！」

「悪い、悪い。そうだったな。でも、りんとらんは飽きないのか？」  
すると、二人とも首を横に振る。そして、その隣の優香が少し笑みを浮かべた表情で言う。

「龍ちゃん。今から話すことを考えれば、集中できると思う。っと、

いつてもまだ龍ちゃんには分からないかな。」

「・・・・・・・・・・？」

言葉はでなかった。今から、話すことって？

ガラガラ！

「・・・・・・・・・・！！？」

ドアの開く音。集会所の人々全員は、ドアに顔を向ける・・・・。集会所の中は、さっきよりもはるかに静かになった。まるで、誰もいないかのように・・・・・・・・。

ドンー！！

「ビクッ！？」

いきなり、後ろから、大きな音が鳴り響いた。思わず、声をあげてしまう・・・・・・・・。

「地区会長及びにー、我らー、東山村ー、村長、及びー  
ー、月光寺ー、寺主の 木下<sup>きのした</sup> 信平<sup>しんぺい</sup> 殿のー、来訪にー  
ー、感謝のー、意味をー、こめー。」

ドンドン！ドン！

「っっはい！！」「っ」

パチン！！

全然、流れにのっていけない・・・・。どうやら、大きな音の正体は、太鼓らしい・・・・。そして、その太鼓と掛け声で、音頭をとり、最後に、みんなで一緒に一回拍手ということだな・・・・。  
俺、何も聞いてないんですけど・・・・。

ドスドスドス。

「・・・・・・・・・・ん？」

気がつくと、木下 信平という人は、集会所にあがり、自分の決められた席についた。

（うまく、顔が見えないな。視力落ちたかな？）

そう思い、少し目を細めて見る・・・。  
すると、相手を席をまた立ち上がる。  
そして、どんどん俺に近づいてきたのだ。

（会議２）

「お主が、ここ最近、ここに引つ越してきた者かの？」

「えっ・・・？あつと・・・。そうです。」

俺に近づいてきた、村長及び、地区会長、及び、ここの寺の・・・。  
いや、分かりやすく言うと、木下姉妹のおじいちゃんとも言える方が、今、俺の目の前にいる・・・。

何だか、ぞくぞくするな。

「ふむふむ、どれどれ、面をあげい。」

俺は、そう言われ、しぶしぶと顔を少しあげた・・・。

（逆光で、さつきから顔が見えないんだが・・・。）

「ふむふむ、そうか・・・。」

村長はそう言くと、優香の隣にいる桜ちゃんと天音ちゃんの方に顔を向けた。

「桜————！天音————！」

ビクッ！

「「は、はい・・・！」」

いきなりの大声・・・。思わず、こっちがびっくりだ・・・。

「お前らというやつは・・・。」

ゴクリ・・・。

俺は、村長の次の言葉を聞くのがこわかった。・・・次にくる言葉が、俺の容姿、性格について言われると思ったからだ・・・。  
俺は、思わず自然に顔をうつぶせた・・・。

「合格よ——！」

「えっ！！！！！！？」

思わず、俺が聞き返してしまった。耳が嘘をついたのかな？

「こんな、美少年を口説きおとすなんて、私の孫も隅に置けないわね。おほほほ。」

「えっ！！！！！？」

俺は2度目の聞き返しをしてしまう……。もはや、耳の方が正直なのかと思いこんでしまったからだ……。

そして、ついに、俺の耳が正直なのかを調べるためのタイミングがやってきた……。

雲で太陽が隠れたのである……。このおかげで、逆光はもうない……。

俺は、目の前にいる、村長の顔を見てみた……。

「……………」

言葉は出ない……。何でかって？そんなの決まっている……。さっきの村長の口調を聞けば分かる……。そして、顔を見ても分かる。

えっ、何が言いたかった？そんなの、見たら吐き気がするようなちよつと、逝くような……。そんな、感じの顔にこの方はしてしまってるんですよ！自ら、化粧という方法で！！

「あのー？ちよつといいですかね？村長さんって、ニューハーフなんですかね？」

単刀直入に言ってみた。村長は、化粧でピンク色に染まっている顔を近づけて、にっこり笑顔でこたえてくれた。

「ニューハーフじゃないのよ、私は完全な乙女なのよん」

「……………」

駄目だ……。こいつもう、手遅れだ。

そう、思う、中学2年の残暑、やがて会議が始まるのであった。

### （会議3）

残暑、昼下がり……。

外は暑いが、集会所の中は木製のおかげか、夜みたいない涼しさだ……。



。。

「・・・ですから、今年に入ってからの高齢者の割合が、前年に比べ、減ってきていると・・・。」

「確かに、去年に比べて減ってきている・・・。しかし、移民の数は増加している傾向にありまするぞ！」

あんなこんなで会議は、人口についての話し合いが始まっている・・・。

俺の隣の、りん、らん、そのほかにも、全員がメモ帳を開いて、メモっている・・・。

こいつら、日頃から持ち歩いているのか？と突っ込みたくなるが、ここは真面目にいかないと後が怖いだろうと思い、流してみる。

ざわざわ、ざわざわ・・・。

メモリながら、みんなは独り言のように何かをつぶやいている・・・。

こうやって見ると、何だかみんな、何かにとりつかれてるようだ・・・。

「皆の衆、静かになさい！人口構成については、話し合いは終わりにします。」

木下姉妹のおじいちゃんの声でおじさんもおばさんもりん、らん、優香、桜ちゃん、天音ちゃん・・・。みーんな、ペンとメモ用紙を置いた・・・。

「続いて、9月の本会議に入りたいと思います・・・。いいわね？」  
ゴクリ・・・。

本会議・・・。今の俺には意味は分からなかった。だが、さっきまでの雰囲気とはまた違う雰囲気に一瞬にして変わったのは俺でさえ分かった・・・。

ドクドク・・・。ドクドク・・・。

心拍音が伝わってくる・・・。

「本会議入ります・・・。今年に入っの100年罰当たりの死者数は、10人です・・・。」

ドクン、ドクン。

今の言葉を聞いたとたん、心臓がいつもの倍以上に、動きだす……。

(会議4)

ざわざわ……………。

本会議……………。それは、俺の心と頭の隅っこに封印しておいた、東山100年罰当たりの話し合いだった……………。

木下祖父が言った、今年に入って10人死亡という言葉聞いた集会所の人達は顔を見合わせて、驚いた表情で騒ぎ始める……………。

「静かに！少しお黙りなさい！」

木下祖父の鋭く、華麗な声で集会所の中にまた沈黙がおとずれた……………。

「今から、私が死因、その人の年齢、性別を言っていくから、必要なことはメモしておくこと。いいわね。」

ゴクリ……………。

思わず俺は生唾を飲み込んだ……………。

「まず一人目……………。死因は大量出血によるショック死……………。年齢は40〜50代、男性……………。詳細としては、例年と同じように目立った外傷もないのに出血だけ死亡……………。この方は、警察官だったよね」

。

└

一人目の説明は終わり、二人目の説明に入ろうとしたときだ……………。ぶつぶつ……………。ぶつぶつ……………。

誰かの独り言が俺の耳に入ってくる……………。

「……………警察……………。みる！あた……………達に協力……………から、罰……………。なんだ……………。と、安河原の神様が……………ったんだよ！……………。ヒヒヒヒ。」

途中、途中、言葉が聞き取れず、何を言ってるか分からなかった。

だが、警察と神様……。何か関係があるのかな……。

「以上で、すべてよ！」

木下祖父の声……。

なんだ、誰かの独り言を聞いているうちに終わってしまったのか……。

（もうちよつと、罰当たりについて知りたかったのにな……。）

そんなこんなで、窓のほうから外を眺めてみた……。

夕日が沈みこんでいく……。今日もこれで終わりか……。

きつと、明日もいい日になるんだろうな――。

そんなことを思っている俺……。

会議は間もなく終了だ……。

#### （会議5）

カナカナカナカナ……。

夕方になり、ひぐらしがいつせいに鳴き始めた……。

昼間に比べて外の気温は、急激に下がり、肌寒さが増す……。

「「「ありがとうございます！」「」「」」」

ガヤガヤガヤガヤ……。

一瞬にして変わった場の雰囲気……。集会所の中には賑やかさが増す。

「は―――！」

気が抜けたのか、俺の口からは自然にため息が抜けていく……。

そんな俺の首裏に、冷たい感覚が伝わってきた……。

「ひっ！―――！」

俺は思わず悲鳴をあげ、身を縮めた……。

「あはは！龍ちゃんお疲れ様！」

身を縮めている俺に声をかけたのは、優香だった。よく見たら冷えた缶ジュースを両手に一つずつ持っている……。

「お前な―――！こんな寒いときにそれをしてたら、いくら俺でもあ

の世逝きだぞー!!」

「へー！ー！そりゃー、面白いー!!」

優香はそう言ってニヤリと笑う・・・。

「ほれ!!」

「・・・ぎゃー！ー!!」

やりやがった・・・。俺があんなこと言っただけに・・・。

そう、今俺のふところはものすごくひんやり冷たい・・・。あれー

ー？ここ南極だったけー！ー？今度からは、ちゃんと腹巻き用意しないとな・・・。

おや？おかしいなー？南極なのに川が見える・・・。あそこのおじいさんは誰だー！ー？俺を呼んでいるー！ー！逝かないとなー！ー！

ボフツ!!

「うおーえ!!」

そのとき、腹に強烈な痛み・・・。俺は我に帰った・・・。

「危なかったなー！ー！ほんまに死んでまうとこやったやんけー！ー!!」

「龍ちゃんの、顔が完全に幸せそうだったよね（笑）!!」

いつの間にか、りんとらんも話しに参加していた・・・。

「優香が俺の服の中に冷えた缶ジュースなんか入れたからな。まったく、心筋梗塞になっちまうところだったし!!」

「いやー！熱い、熱い心を持っている龍ちゃんの心を冷やしてあげようとしただけだよ!!」

ニヤニヤしている・・・。こいつ、絶対わざとだ！違うない!

「ほー！ー！あなた達！もう集会所閉めるわよ！早くお家に帰りなさい!!」

その時、集会所の入り口で木下祖父が鍵を持って俺達に呼びかけた・・・。

「「「はー！ー！い!!」」」

そうして俺達は玄関へと急ぐ・・・。

「あ！海道くん！」

木下祖父が靴を履こうとした俺を呼び止めた・・・。

「これ、良かったら連絡してね」

一切れのメモ用紙・・・。それを渡され、開いて見た・・・。

そこには、丁寧に書かれた、電話番号とメアドが記されていた・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1669p/>

---

無限物語 第2章（光灯し）

2010年12月2日17時19分発行